

フランス大革命におけるジャコバン主義の本質について

柳, 春生
九州大学産業労働研究所教授

<https://doi.org/10.15017/1609>

出版情報 : 法政研究. 36 (2/6), pp.309-325, 1970-12-20. 九州大学法政学会
バージョン :
権利関係 :

フランス大革命における

ジャコバン主義の本質について

柳 春生

はしがき

フランス大革命は、フランスにおける旧制度と絶対君主制にたいする第三身分の革命的闘争であるといわれているが、それは、マルクスが述べているように、フランスのみならず全ヨーロッパのための新しい近代的な社会的秩序の樹立の宣言であった点に、世界史的意義をもつ。この革命の時期は、一七八九年五月——六月より一七九九年十一月九日（ブリュメール十八日、ナポレオンのクーデタ）までの時期とされているが、このなかで、一七九三年六月——九四年七月二四日（テルミドール九日）までのジャコバン党の独裁、いわゆる恐怖政治（Terreur）といわれた時期こそがフランス大革命の最高揚期であり、革命の課題を解決したもつとも光輝ある時期といわれ、そして、この時期に民主主義精神の象徴ともいわれるジャコバン憲法が制定され、国民投票をもって成立した。私の研究は、この憲法における新しい国家像をルソーとの関連のもとに把握せんとする試図であるが、この論文はその前提となる部分であ

る。

フランス大革命の憲法の研究は、わが国においては、美濃部、宮沢、清宮、長谷川等憲法学者によってすすめられ、⁽¹⁾さらに京都大学人文科学研究所報告「フランス革命の研究」のなかで樋口謹一氏によって緻密な分析がおこなわれ、⁽²⁾最近では杉原泰雄氏、高野真澄氏によって力作が発表され、⁽³⁾そして私もソブール教授の来学にも刺激されて人民主権にかんする二つの論文を発表したが、⁽⁴⁾研究方法としては、たんに憲法典の憲法学的な分析にとどまらずに、ジャコバン権力体制の階級的分析をつうじて、革命を指導するブルジョアジーたるジャコバン（モンターニュ）と革命の推進力となったサン＝キュロット（都市の大衆）における憲法意識、すなわち古い国家機構にかわる新しい近代的な国家制度創出の理念の追求にまですすむことが必要である、と考えるにいたった。このように、階級的観点からフランス大革命史研究の端初をきりひらいたとみられるのは、ダニエル・ゲラン「第一共和政のもとにおける階級闘争」⁽⁵⁾（一九四六年、一九六八年改訂増補）であろう。この研究について、そしてこれにたいして、アルベール・ソブールは、豊富な資料をもってその力作「共和暦第二年におけるパリのサン＝キュロット」⁽⁶⁾（「一七九三年六月二日よりテルミドール九日にいたる民衆運動と革命政府」）一九五八年、を発表し、最近も同名の小著を出している（一九六八年）⁽⁷⁾が、そのなかでサン＝キュロットにおける権力機構の構想にかんする詳細な分析をおこなっている。さらに、ワルター・マルコフは、サン＝キュロットのイデオログたるアンラーゼ（Enlages）の研究、⁽⁸⁾とくにジャック・ルールの研究にかんして良心的な成果を発表している。

これまでの日本における研究は、私みづからもまた、このような国際的な研究の成果を充分に汲みつくしている、とはいえない。それゆえに、今後の研究では、ジャコバン権力体制をジャコバンとサン＝キュロットとの対立と統一として把握しつつ、それらにおける国家のイデオロギーを追跡し、分析することが必要とされるであろう。

マルクス主義の古典的創始者達は、ひとしくフランス大革命におけるいわゆるジャコバン党の恐怖政治テロールの時期を研究の対象とした。マルクスは、一八四八年十二月「新ライン新聞」につきのようにかいている。

「二つの革命（一六四八年のイギリス革命と一七八九年のフランス革命—訳者）において、現実、に連動の先頭に立った階級は、ブルジョアジーであった。プロレタリアートとブルジョアジー以外の市民の諸層とは、まだブルジョアジーと別個の利害をもっていなかったか、あるいはまだ独自の発展をとげた階級もしくは階級部分になっていなかったか、そのどちらかであった。だから、たとえば一七九三年から一七九四年までのフランスにおけるように、彼らがブルジョアジーに対立したときでも、彼らは、ブルジョアジーのやり方でこそないが、やはりブルジョアジーの利益を貫徹するためにたたかたにすぎない。あのフランスの恐怖政治の全体は、ブルジョアジーの敵である絶対主義や封建制度や旧弊をかたづけける平民的なやり方（*Plebeische Manier*）にはかならなかった。

一六四八年と一七八九年の革命は、けっしてイギリスの革命、フランスの革命ではなかった。それらは、ヨーロッパ的規模の革命であった。それらは、ある特定の社会階級の古い政治秩序にたいする勝利というものではなかった。それらは、新しいヨーロッパ社会のための政治秩序の宣言であった。それらの革命で勝利したのは、ブルジョアジーであったが、その当時には、ブルジョアジーの勝利は、新しい社会秩序の勝利であった。……………

一六四八年の革命は一六世紀にたいする一七世紀の勝利であり、一七八九年の革命は一七世紀にたいする一八世紀の勝利であった。この二つの革命は、それが起った当の世界の部分、すなわちイギリスとかフランスとかの必要よりも、むしろ当時の世界の必要を表現していた。」

マルクスは、フランス大革命が新しい近代的秩序を創出したことにその普遍的意義を見出している。そして、エン

ゲルスもまた、「空想から科学への社会主義の発展」のなかで、基本的にはマルクスと同じ見地にたちつつ、具体的な分析を与えている。

「パリの無産大衆は、恐怖政治の時代にはほんの一時だけ支配権 (Herrschaft) を獲得し、そしてこのことによってブルジョア革命を、市民階級 (Bürgerium) に反対して、までも、勝利にみちびくことができたとはいえ、このことによつて彼らは、当時の事情のもとで彼らの支配を長く続けることが、いかに不可能であるかを、証明したにすぎなかった。一つの新しい階級の根幹としてこの無産大衆からようやく分離しつつあったプロレタリアートは、自主的な政治行動をなす能力をまだまったくもっておらず、自力更生の能力をもたないので、せいぜい外から、上から助けてやるほかはない、圧迫され苦しんでいる身分として現われた。¹⁰⁾」

エンゲルスが恐怖政治の全時期を或は一時期をサン＝キュロットの権力とみたのであるか、ということについては解釈に苦しむのであるが、ただ、プロレタリアートは他の無産大衆から分化の過程にあり、真の階級的自覚にまで到達していなかったかぎりでは、この権力をただちにプロレタリアートの権力とは規定できない。とはいえ、プロレタリアートを含む無産階級たるサン＝キュロットこそが、このブルジョア革命を勝利に導く原動力となりえたのである。

エンゲルスの見解に相似しているが、しかし問題を残すのは、カール・カウツキーの見解である。彼は、「フランス革命時代における階級対立」のなかでつぎのように述べる。

「しかし、まもなくサン＝キュロットは、ブルジョアジートの同盟者から、その支配者となった。かれらの名声、かれらの勢力、かれらの成熟、かれらの自覚は、革命に対して打撃が加えられるたびごとに、またかれらの時宜にかなった、力強い処置がその打撃を防いだたびごとに、上昇していった。事態が革命にとって凶悪となればなるほど、革

命的な郊外都市の人々の必要性はますます大きくなり、かれらの支配はますます独占的となった。ヨーロッパの君主達が連合してフランスに侵入し、そのうえ同時に国内のいろいろな地方に反革命が抬頭し、政府と軍隊の指導部さえもが一時敵と通謀したときに、かれらは絶頂に達した。当時、革命を救ったものは、立法議会でもなく国民公会でもなく、サン＝キュロットであった。かれらは、ジャコバン・クラブを占拠し、これによって全フランスにわたって拮がっていて、しかもパリから監督できる、組織を獲得した。彼らは、パリの市会を占領し、それによってこの都市の巨大な権力手段に対する無制限の権能を獲得した。そして、ジャコバン・クラブと市会によって、それだけで不十分なときは反乱によって、彼らは国民公会を支配し、政府を支配し、フランスを支配した。⁽¹¹⁾」

だが、このような見地からは、ジャコバンの指導とサン＝キュロットの運動との統一は説明できない。そゆえに、これにたいして、フランス大革命の歴史的意義を深く認識し、ジャコバン党の独裁をその階級の本質の鋭い洞察によって高く評価したのは、レーニンである。

「偉大なブルジョア革命家にもっとも深い尊敬の念を寄せないようでは、マルクス主義者ではありえない。これらの革命家は、新しい民族の幾千万人を封建制とのたたかいのなかで文明生活へと立ちあがらせたブルジョアの『祖国』の名において発言する、世界的な権利をもつていたのである。⁽¹²⁾」

レーニンは、ジャコバンの歴史的・階級的特質をつぎのようにみる。

「真のジャコバン派、一七九三年のジャコバン派の歴史的偉大さは、彼らが『人民とともにあるジャコバン派』、人民の革命的多数者、当時の革命的な先進的諸階級とともにあるジャコバン派だったことにあった。……………一七九三年の偉大なジャコバン派は、ほかならぬ当時の国民の反動的・搾取者の少数者の代表を、ほかならぬ当時の反動的諸階級の代表を、人民の敵と宣言するのをおそれなかった……………⁽¹³⁾」

「……………ブルジョアジエの歴史家は、ジャコバン主義を墮落（『転落』）と見る。プロレタリアートの歴史家は、ジャコバン主義を解放闘争における被抑圧階級の最良のたかまりの一つとみる。ジャコバン党は、民主主義革命と、共和制に反対する君主の連合への反撃との最良の根拠をフランスに示した。¹⁴」

「一七九三年のジャコバン党は、全国家権力を自分の手ににぎった勤労被抑圧者の側からの搾取階級にたいする真に革命的な闘争の偉大な模範として、歴史にのこっている。¹⁵」

「国民公会は、ほかならぬ下層民の独裁、すなわち、都市と農村の貧民の最下層の独裁であった。ブルジョア革命では、これこそほかならぬ絶対権力をもつ機関、すなわち、そのなかでは、大ブルジョアジエまたは中ブルジョアジエではなく、庶民、貧民が、つまり、ほかならぬ『プロレタリアートと農民』とわれわれが呼ぶものが、完全に、無制限に、支配しているような、絶対権力をもつ機関だったのである。¹⁶」

このように、レーニンは、ジャコバン党の独裁の本質を、革命的な先進的階級たる勤労・被抑圧階級の反革命にたいする権力とみている。ジャコバン党はこの権力を指導する。さらに、レーニンは、フランス大革命の教訓を当面するロシアのプロレタリア革命の実践との対比においてつぎのように述べる。

「フランスの偉大なブルジョア革命家たちは、一二五年まえに、すべての抑圧者にたいして、すなわち地主にたいしても資本家にたいしてもテロルを行使することによって、自己の革命を偉大なものにしたのに！」¹⁷「一七九二年

——一七九三年におけるフランス人の英雄的な愛国主義と軍事的勇敢さの奇跡とが、いつでも引合いにだされる。しかし、この奇跡をはじめて可能にした物質的な、歴史的・経済的な条件はわすれられている。すでに生命のつきた封建制を、真に革命的にかたづけ、国全体をより高度な生産様式に、自由な農民的土地所有にうつしたこと、しかも、真に革命的民主主義的な速さと、断固さと、精力と、献身とをもってそうしたこと、これが、フランスの経済的基礎

を更生させ、革新して、フランスを『奇跡的』な速度ですくった、物質的、経済的な条件⁽¹⁸⁾であった。」

「十八世紀末におけるフランスの物質的革新、生産上の革新は、政治的および精神的な革新と、革命的民主主義派と革命的プロレタリアートとの独裁（民主主義派は革命的プロレタリアートから分離しておらず、後者はまだほとんど前者と融合していた）と、すべて反動的なものにたいして宣言された仮借ない戦いと、結びついていた。全人民、とくに大衆、すなわち抑圧されている諸階級は、無限の革命的熱情にとらえられていた。すべての人が、戦争を正義の戦争、防衛戦争とみなしていたし、また実際にそうであった。革命的フランスは、反動的君主主義的なヨーロッパにたいして、自己を防衛したのであった。ナポレオンの反革命的独裁が、フランスの行う戦争を、防衛戦争から征服戦争にかえたのは、一七九二年—一七九三年ではなくて、それから何年もたってから、すなわち反動が国内で勝利を始めてからのことであった。」⁽¹⁹⁾

さらに、レーニンは、十月革命後に当面したロシアの困難を大革命のフランスと比較しつつ、つぎのようにかいている。

「一七九二年のフランスは、わが国におとらないほど荒廃をうけていたが、革命戦争はすべてをいやし、すべてを鼓舞し、熱情を呼びおこし、すべてを克服した。……………」

……………十八世紀末のフランスでは、まずはじめに新しい、より高い生産様式の経済的基礎がつくられ、強大な革命的軍隊はその結果であり、上部構造であったというのが事実である。フランスは、他国よりもさきに封建制を投げ捨て、五年間の勝利の革命のあと、封建制を一掃し、どんな戦争のためにもつかれてはいない、自由と土地を獲得した国民、封建制をとりのぞいたために強化された国民を、経済的・政治的におくれている一連の諸国民とたたかわせた。

敗北した封建制、強化されたブルジョア的自由・封建諸国に対抗する満腹した農民——これこそ、軍事的領域における一七九二年—一七九三年の『奇跡』の経済的基礎である。⁽²⁰⁾」

このようなフランス大革命の教訓にもとづき、レーニンは、ロシアのプロレタリアートに継承せられるジャコバン主義についてつぎのように強調する。

「ヨーロッパ、またはヨーロッパとアジアの境界における二十世紀の『ジャコバン主義』は、革命的階級であるプロレタリアートの支配となるであろう。このプロレタリアートは、貧農に支持され、社会主義運動の物質的基礎の存在を抛りどころとして、十八世紀のジャコバン党があたえた偉大な、根絶しがたい、忘れがたいものをすべてあたえるだけでなく、世界的な規模で、勤労者の確固たる勝利をもたらすことができるであろう。

ジャコバン主義をにくむのは、ブルジョアジーの特質である。ジャコバン主義をおそれるのは、小ブルジョアジーの特質である。自覚した労働者と勤労者は、革命的な抑圧された階級への権力の移行を確信している。というのは、ここにこそ、ジャコバン主義の本質があり、危機があり、危機からの誰一の活路、経済的崩壊と戦争からの解放があるからである。⁽²¹⁾」

そして、このような反動的なロシアの小ブルジョアジーに対して、彼は大革命におけるフランスの小ブルジョアについては、「一二五年まえには、もつとも熱烈な心からの革命家であったフランスの小ブルジョア⁽²²⁾」、⁽²³⁾「一七八九年には小ブルジョアはまだ大革命家でありえた」と評価している。

それゆえに、レーニンは、ジャコバン主義の本質を、歴史的に規定された、すべての勤労・被抑圧階級の革命的エネルギーを吸収し、この階級と革命的ブルジョアジーとの統一を代表する権力とみて、その意味においての権力を、

革命的諸階級（革命的・民主主義的ブルジョアジー、小ブルジョア、プロレタリアート）の反革命にたいする民主主義的統一戦線として把握している、と理解してよいであろう。

以上、マルクス主義の古典における諸見解を検討したのであるが、つぎにフランス革命史の研究家たちはいかなる見解を示しているであろうか。これについて考察しよう。

二

ジャコバンの政治的・階級的性格については、「フランス革命の研究」にも述べられているように、オラール、ジョーレス、ゲランは、ジロンドンのそれと対比して両者のあいだに本質的な差異を認めない。オラールは、「フランス革命の政治史」のなかで、「ジロンドンの宗教的見解とモンターニュ一般のそれとのあいだにはまったく本質的な差違はないのであって、もしあるとすれば、ジロンドンの宗教的見解とロベスピエール個人のそれとの間にあるにすぎない。」と述べ、ジャン・ジョーレスは、「フランス革命の社会主義史」のなかで、「ジロンドンの社会観とモンターニュのそれとのあいだには、根本的な対立はない。……モンターニュ……もジロンドンも、所有権の尊重とその本質的な形式とを明確に保障しようとしていた。ジロンドンとモンターニュとの政治闘争は、この二つの党をして一方はブルジョアジーの利益に、他方は民衆（プーブル）の力に依拠させるにいたった。しかし、この闘争は、本質的な階級闘争というよりはむしろ、まったく党派の抗争であった。」⁽²⁶⁾とかいている。そして、ダニエル・ゲランは、「第一共和政のもとでの階級闘争」のなかで、以上のような見解をさらに展開して、つぎのように叙述している。

「ジロンドンとモンターニュとは同じ階級に属していた。……両者のあいだにはなんら基本的な差異はな

い。彼らはともに、私有財産の熱心な擁護者であった。……………彼らは同じように、直接民主制、公的生活における武装した主権者——人民——の干渉をおそれ、議会主義的擬制と合法制に固執していた。両者ともに経済的自由主義の信奉者であった。彼らはあらゆる規制、あらゆる統制に原則上反対であった。したがって、彼らの間には固有の意味での階級闘争はない。⁽²⁷⁾「彼等は……………二つの異なった階級ではなく、同一階級内の二つの分派^{フラクシオン}である。」⁽²⁸⁾両者のちがいは、下層民に対する態度の相違であるが、「下層民^{ブラ・ニユ} (bras nus —「裸の腕」) に対するジロندانとモンターニュとの態度のちがいは、彼等の利害関係の相違に帰因する。……………ジロندانは、商業と消費物資の輸出とに利害関係をもつブルジョアジーによって支持されていた。すなわち、グルノーブル、ルーアン、モンペリエ、モントーバンなどのような繊維工業の中心地、リヨンなどの絹工業地、ボルドー、マルセイユ、ナントなどの植民地との貿易に従事する大貿易商人が彼等の主な支持者であった。」⁽²⁹⁾「これに反して、モンターニュは、インフレーション、国有財産の獲得、軍隊への物資供給、のちには武器の製造によって巨大な利益をえたブルジョアジーの分派を代表していた。しかも、この二つの分派のあいだには越えがたい障壁があったのではなく、反対に、ブルジョアジーの大部分は、利益の新たな源泉をもとめて……………ジロندانからモンターニュへうつつていった。」⁽³⁰⁾ブルジョアジーは、下層民に「宴会の残りカス」を与えてやるだけの充分な資金をもっていた。「ブルジョアジーが若干の統制措置を甘受したのは、その犠牲によってのみ彼の有利な操作が持続できたからである。」⁽³¹⁾

すなわち、ゲランは、むしろブルジョアジーとサン||キュロットとのあいだに對立をみて、サン||キュロットの革命政府に対する抗争のうちに、プロレタリア革命の萌芽を発見せんとする。⁽³²⁾だが、この見地は、ジャコバンとサン||キュロットとの統一戦線否定論となる。

このようなゲランの見解に對立するのは、アルベール・マチエの見解である。彼は、「フランス革命史」のなかで

つぎのように述べる。

「……………ジロندانとモンターニュとの対立は、八月十日事件以来、もはや純然たる政治的対立ではなかった。階級闘争が姿をあらわしたのである。……………大部分のモンターニュは、事実、ジロندانと同様に、ブルジョアジーの出身であった。彼らが始めた階級政策は、まったく人民のなかから出たものではなかった。カール・マルクスがいったように、これは、王や僧侶や貴族とまた大革命のすべての敵と縁をきる、応急の政策であり、平民的なやり方であった。このことが、彼らの政策を根本的にジロندانの政策と対立させたのであった。³³⁾」
 「ジロندانは猛威をふるっている恐るべき経済的危機のさなかに、……………サン＝キュロット階級の一切の要求に、偏狭で辛辣な態度で反対した。……………彼らは公共の福祉を無視し、ブルジョアジーだけに奉仕する階級政策に没頭した。³⁴⁾」

マチエは、かくてジャコバン独裁の階級の本質をつぎのように規定する。

「革命政府は、一階級、すなわち、自分の運命を断乎として革命の運命に結びつけたブルジョア階級の人々によって、また特に、軍需品製造で富んだこの階級の人々によって指導されている、消費者、職人、小所有者および貧乏人たちの諸階級のために行使される一党派の独裁 (La dictature d'un parti) となった。

一党派または一階級の独裁は、もっともしばしば、力 (La force) によって、はじめて樹立される。このことは、戦時には必然的なことである。革命政府は、宿命として恐怖政治をと^{テレル}もなった。³⁵⁾」

それゆえに、マチエは、ジャコバン独裁は、本質的には、この独裁がその利益のために行使されるところの、サン＝キュロットのための権力である、とみているのではなからうか。

さらに、ジョルジュ・ルフェーブルも、「フランス革命史」のなかで「ジャコバンの誰も、私有財産の抑圧を考えなかった。彼等は、経済的統制や、とくに固定価格に固執しなかった。……………しかし、彼等は、革命を守るために

民衆の要求する若干の措置を行使することができた。⁽³⁶⁾」と述べている。

しかしながら、ゲランの見解に反対し、マチエの見解を継承しつつ、ジャコバン独裁の階級の本質にかんしてもっともすぐれた考察を示しているのは、アルベール・ソブールである。彼は、「フランス革命史」のなかで、ジロンドンとモンターニュとの闘争を階級闘争とみる。

「ジロندانは、人民の要求する制限に反対して、財産と経済的自由とを守ろうとする、持てる、商工業ブルジョアジーを代表していた。……」

モンターニュは、中ブルジョアと (La bourgeoisie moyenne) と、戦争とその諸結果、生活費の値上り、失業、十分な賃金に苦しむ、職人、商店主、消費者の庶民階級 (Les classes populaires) を代表していた。山岳党員も、⁽³⁷⁾それ自身はブルジョアジーの出身であったが、フランスの危機的情勢が異常な解決を要求しており、それは人民の支持をまわって始めて効果をあげることができるということを理解していた。⁽³⁷⁾」

「それゆえに、ジロندانとモンターニュとの争いは、階級闘争の様相をおびた。たしかに、山岳党員の大部分は、ジロندانと同様ブルジョアジーの出身ではあったが、しかし、国と革命の防衛の必要が、彼等に大衆のためになる政策を、すなわち、或ることがらに対しては原則にかなった政策を、他のことに対しては応急の政策を、強いたのである。モンターニュがうけいれ、合法化した恐怖政治^{テール}は、マルクスの言葉によれば、『ブルジョアジーの敵たち、すなわち絶対主義、封建制と絶縁する平民的なやり方』にほかならなかった。⁽³⁸⁾」

ソブールは、ブルジョアジーとサン||キュロットとのあいだに社会・経済的並に政治的領域において一定の対立を認めるとともに、両者が共同の敵、貴族をもっていたことを指摘する。⁽³⁹⁾サン||キュロットは、「政治的には革命のもっとも先進的な党派を代表していたが、経済的には、独立小生産者、手工業者、小商店主に根底をもっていた。⁽⁴⁰⁾」そ

れゆえに、サン＝キュロットの運動にプロレタリア革命の萌芽を見ようとするゲランの見解は、誤りである。「彼は、伝統的経済の立場を擁護する、まったく後衛にすぎないものを、プロレタリアの前衛とみなしている」⁽⁴¹⁾だが、「サン＝キュロットは、封建貴族に対してたたかうかぎり、歴史の方向に前進しているのである」⁽⁴²⁾「革命政府は、「サン＝キュロットとジャコバン派ブルジョアジーという二つの社会的基盤のうえに組織された」⁽⁴³⁾かの最高価格法は、ジャコバンとサン＝キュロットとの同盟を前提としている」⁽⁴⁴⁾このような見地から、ソブールは、革命政府を、ブルジョアジーの一分派の指導のもとにおけるサン＝キュロットの独裁、すなわち、商店主、職人、労働者という「労働し生産する人々」の同盟と規定する⁽⁴⁵⁾。そして、ソブール教授は、一九六七年十一月二日九州大学文学部での研究集会における報告のなかで、ジャコバン党の権力の階級的本質を、指導的地位にある革命的ブルジョアジー・ジャコバンと、基底にあるサン＝キュロットとさらに農民を含むところの反革命に対する同盟——但し、それらの間には矛盾があった——としてのフロン・ポピュレールと規定された。このように、ソブールは、この同盟における統一の力と封建・反革命勢力との間に、本本的な矛盾・対立をみる。

つぎに、「フランス革命の研究」は、ジャコバンをプチ・ブル勢力の代表とみて、「モンターニュ派独裁の本質は、プチ・ブル勢力が反革命にたいしてのみならず、ブルジョアジーに対しても『革命的独裁』を実施した点に求められる」⁽⁴⁶⁾と述べている。勿論、誤りとまでは言はないが、規定としてはもう少し厳密さが要求されるであろう。ジャコバンとサン＝キュロットとは階級的に異質であり、かつ政治的見解においても、一七九三年新憲法制定に際して提起された代議制か直接民主制かの議論に見られるように、対立していた⁽⁴⁷⁾。かつ、ジャコバンといえどもシャブリエ法を廃止しようとしなかった。このように、階級的矛盾を露呈しながらも、革命的ブルジョアジー（ジャコバン）と、プロレタリアートをも包括するサン＝キュロットとの封建的・反革命に対する統一戦線にジャコバン独裁の本質をみる

ことができる。そして、この統一戦線の方向こそが階級闘争の基本路線である。ソビエト科学アカデミ編「世界史」は、「ジャコバンの革命的・民主主義的独裁」と規定して、「ジャコバン独裁の期間は短くはあったが、革命の最も偉大な時期であった。ジャコバンは眠っていた人民の力を呼びさまし、その猛烈なエネルギー、勇氣、大胆、自己犠牲の精神、不敵さ、果敢さをふるい立たせることができた。だが、いかに永遠に変わらぬ偉大さと、歴史的進歩性をもっているにせよ、ジャコバン独裁もなお、あらゆるブルジョア革命に特有な限界を打ち破ることはできなかった⁽⁴⁸⁾」と記し、これを人民革命とみる。^{ナロードナヤ・レツオリユツィヤ(49)}

- (1) 美濃部達吉「議会制度論」、宮沢俊義「憲法の原理」、清宮四郎「権力分立の研究」、長谷川正安「フランス革命と憲法」上、下(法律学体系第二部、法学理論篇)、参照。
- (2) 桑原武夫編「フランス革命の研究」、第二章権力機構。
- (3) 杉原泰雄「国民主権の憲法史的展開」、一橋大学「法学研究」6。高野真澄「ジロンド、ジャコバン両憲法における人民主権実現の構想」、尾道短大研究紀要、第十六集、「フランス憲法における代表民主制の展開」、同誌、第十五集。
- (4) 「フランス大革命の憲法における人民主権の問題」、法政研究第三四卷、第五—六合併号。「フランス大革命の憲法における人民主権の問題について」、西日本短期大学「大憲論叢」第一〇巻第一号。
- (5) Daninel Guérin, *La lutte de classes sous la première République. 1793—1797*. 1946. Nouvelle édition. 1968.
- (6) Albert Soboul, *Les Sans-culottes Parisiens en l'an II*. 2^{ed}. 1962.
- (7) Ebenda. (*Mouvement populaire et gouvernement révolutionnaire*.) 1968. これらについては、柴田三千雄「最近におけるパリの『サン＝キュロット』運動の研究(史学雑誌、第七一編、第一〇号、四八頁)参照。
- (8) Walter Mrkov, Jacques Roux und Karl Marx. 1965. Jacques Roux oder vom Elend der Biographie. 1966. *Die Freiheiten des Priesters Roux*. 1967.

- (9) Marx—Engels Werke. 6. ss. 107—108.
- (10) *ibid.* 19. s. 193. なお、「反デューリング論」では、同一文章のうち「市民階級に反対してまでも」が削除されている。
(*ibid.* 20. s. 240.)
- (11) Karl Kautsky, *Die Klassengegensätze im Zeitalter der französischen Revolution*. 1923. s.53. 邦訳、八〇—八一頁。
- (12) Lenin, *Sochinenija*.21. s.197.
- (13) *ibid.*24. ss.495—496.
- (14) *ibid.*25. s.331. なお、レーニンはつづいて述べる。「ジャコバン党は、完全な勝利を勝ちとる運命におかれていなかった。それは、主として、十八世紀のフランスが、大陸であまりにも立ちおくれた国々に取りまかれていたからであり、しかもフランス自体でも、社会主義のための物質的基礎がなく、銀行、シンジケート、機械製工業、鉄道がなかったからである。」(*Ebenda.*)
- ジャコバン主義にたいするレーニンの見解を指摘したものとしては、A.A. Gertsenzon, *Maksimilian Robespier*. 1958. *Ebenda, Problema zakonosti i pravosudija vo frantsuzskix politicheskix uchenijax xviii vekax*.1962. 参照。また、レーニンのかかる見解に対応するマルクスの見解は、つぎの言辞にみられる。「さらに周知のように、一七九三年の憲法とテロリズムとは、激昂したプロレタリアートをよりどころとしたところの、党に端を発するものであったし、ロベスピエールの滅亡は、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの勝利を意味するものであったし、平等のためのバブーフの陰謀は、九三年の民主主義の最後の帰結——当時可能であったかぎりの——を明るみに出したものであった。フランス革命は、はじめからおわりまで、社会的な運動であった。」(*Marx—Engels Werke*.2. ss. 612—613.)
- (15) *ibid.* 25. s. 42.
- (16) *ibid.* 10. s. 339.
- (17) *ibid.* 25. s.331.
- (18) *ibid.* 25. s. 335.
- (19) *ibid.* 25. s. 336.

- (20) *ibid.* 27. ss. 3—4.
- (21) *ibid.* 25. s. 102.
- (22) *ibid.* 32. s. 310.
- (23) *ibid.* 32. s. 338.
- (24) 桑原編「フランス革命の研究」、四九二頁。
- (25) A. Aulard, *Histoire politique de la Révolution française*. 6éd. 1926. p. 397.
- (26) Jean Jaurès, *Histoire socialiste de la Révolution française*. édition revue par Mathiez, t. 7, 1924. p. 515.
- (27) Daniel Guérin, *La lutte de classes sous la première République*, t. 1, 1946, p. 101. Nouvelle édition, p. 115.
但し、この新版では「固有の意味での階級闘争はなから」が削除されている。
- (28) *ibid.*, p. 101. N.é p. 115.
- (29) *ibid.*, p. 102. N.é. p. 116.
- (30) *ibid.*, p. 103. N.é. p. 117.
- (31) *ibid.* p. 103. N.é. p. 117.
- (32) François Furet. Denis Richet, *La révolution*. 1. 1965. p. 297.
- (33) Albert Mathiez, *La Révolution française*. t. 2. 2^eéd. 1927. p. 69. 邦訳「フランス大革命」、中、九六頁。
- (34) *ibid.* p. 222. 邦訳「同書」中、二九四頁
- (35) *ibid.* t. 3. 12^eéd. 1963. p. 77. 邦訳「同書」下、一一四頁。
- (36) Georges Lefebvre, *La Révolution française*. 1963. p. 266. *The French Revolution*. translated. vol. 1. p. 246.
- (37) Albert Soboul, *Histoire de la Révolution française*. 1. 1962. p. 324. 邦訳「同書」下、一一二—一一三頁。
- (38) *ibid.* pp. 327—328. 邦訳「同書」下、一一四頁。
- (39) A. Soboul, *Robespierre und die Volksgesellschaften*. (Maximilien Robespierre. 1758—1794. herausgegeben von Walter Markov. 1958.) s. 287, *ibid.* 1961, s. 271, A. Soboul, *Klassen und Klassenkämpfe in der*

- françösischen Revolution. (Jakobiner und Sanculotten. herausgegeben von W. Markov.) ss.67—68.
- (40) A.Soboul, *Klassen und Klassenkämpfe in der französischen Revolution*.s. 68.
- (41) *ibid.* s. 68. 遠藤輝明、柴田三千雄訳、ソブール「フランス革命における階級と階級闘争」(歴史学研究、一六五号)、一五頁参照。
- (42) *ibid.* s. 69. なお、レーニンは小生産者における平等の思想について述べる。「しかし、平等の思想こそ、ブルジョア民主主義的任務のもっとも完全な、一貫した、断乎たる表現なのである。」(Lenin, Soch. 12. s. 316.)
- (43) A.Soboul, *Révolution française. «Que sais-je?»* 1967. p. 69.
- (44) A.Soboul, *La 1^{re} République*. (1792—1804). 1968. p. 146.
- (45) A.Soboul, *La Révolution française*. 1789—1799. 2^{ed}. 1951. pp. 252—253. 邦訳、上掲書、下、七六頁。
- (46) 「フランス革命の研究」、一一頁—一二頁。
- (47) サン＝キュロットは直接民主制を主張するに對して、ジャコバンは代議制を主張するが、ロベスピエールはサン＝キュロットの見解に接近し、意志は代表されえない、というルーソーの精神を繼承する。(Oeuvres de M. Robespierre. t. 9. p. 569. Archives Parlementaires. série. 1. t. 63. pp. 204—205. *ibid.* t. 66. p. 578.)
- (48) *Vsemirnaja istorija*. VI. 1959. s.49. 邦訳、ソビエト科学アカデミ版「世界史」近代4、五七頁。
- (49) ジャン・フレヴィユはレーニン生誕百周年記念論文「レーニンとフランスの革命的経験」(「平和と社会主義の諸問題」誌、ドイツ語版、一九六九年十号、一二九六頁、日本版、一九七〇年春季号、四四頁)のなかで、レーニンがフランス大革命を真に科学的な立場から評価し、この革命に人類の解放闘争の過程における巨大な勝利をみたことを、指摘している。レーニンはフランス革命の意義をつぎのように述べている。「フランス革命——十八世紀のはじめに、旧列強はそれを押しつぶすために、それに敵対した——が大革命と呼ばれているのは、この革命が自己の成果をまもるために、全世界に抵抗する、広範な人民大衆を立ちあがらせることができたからにはかならないのであって、まさにここに、この革命の大きな功績の一つがあるのである。」(Lenin, Soch. 29. s. 49.)——一九七〇・一・三一——